

① ガス (2016年6月18日 群馬県 谷川岳天神尾根)



たまにはメジャーな山をということで谷川岳に行ってきた。それでこんなクソ面白くもない写真かと憤られる方もいるかもしれない。

谷川岳はロープウェーを使えば気軽に登れる山だが、あいにく整備の為運休中。

そうなると日本三大急登の西黒尾根に行くか、ロープウェー下を歩くかで、今回は安全の為に後者を選んだ。ただし、もしロープウェーが動いていても、登りで乗ることはないだろう。それは安全とは異なる、精神性の問題による。

そして、このガスのかかり具合である。天気図は全く問題ないのだが、平地から山に向かって強い北風が吹いていて、それが山稜を越える時に気圧が下がってガスを産む。するところなる。

大体山の頂はガスっている。体感で8割はガスっている。そうしてガタガタ震えながら休憩して冷たいおにぎりを頬張る。人生そんなものだと思っておけば、大抵のことは何とかなる。

② ウソ (2016年6月18日 群馬県 谷川岳天神尾根)



最近、登山道上で野生生物に出くわす率が高い。

先週は太郎兵衛平に登る際にノウサギを見た。がさっと音がしたので、振り向けば茶色い奴が居て、すかさずデジカメの電源を入れたものの、あっという間に走り去っていった。ノウサギの最高時速は約 70km/h とも言われる。あれを追いかけたアリスはすごい。

今回出くわしたのはウソだった。登山道上に居たので静かに近づき、撮影させてもらった。このコンパクトカメラでライチョウ以外の鳥を撮るのはなかなか難しい。小さすぎてピントが合わないし、ぶれてしまうのだ。また小鳥の類はせわしなく動くし、ヒトが音を立てると逃げてしまう。

そう考えるとライチョウ、あいつはでっけえなあ！と思う。いろいろな意味で。そこが愛らしい。でもウソも可愛い。

③ ササ野原 (2016年6月18日 群馬県 蓬峠)



谷川岳から北上して、いくつかのピークを踏んでおよそ8時間でたどり着く蓬峠。一面のササ野原だ。ガスった山頂なんかどうでもいい、今回はこの景色に逢いに来た。この、高山でもない、低山でもない、草原の景色が大好きだ。

ササは明るい森林の下層植生として出現したり、高山であればハイマツ群落と雪田群落の間に出現したりする。私が高山で調べたことから考えると、ここの雪解けはハイマツ群落が成立するには遅く、雪田群落が成立するには早いぐらいのタイミングなのだろう。地形が平坦なので、雪がほぼ均一に狩り付き、春に一斉に溶ける。高木がないということは冬場にこの峠を吹き抜けていく風は相当強いだろう。

こんな景色に逢うと、山をやっていてよかったと思う。見渡す限りの草原の中、強い風が吹き渡っていく。

④ 一ノ倉沢 (2016年6月18日 群馬県 谷川岳)



ここが世界一遭難死者の多い一ノ倉沢である。ほぼクライマーによる事故だ。林道沿い至る所に慰霊碑がある。私のように尾根を行くものも遭難には十分に気を付けなければいけない。疲労、ケガで動けなくなるような事態は避けなければいけない。家に帰るまでが登山だ。この写真は登山開始 11 時間目ぐらいの写真で、構図、光の加減など、もうどうでもよくなっていることがよくわかる。

今回は谷川岳から縦走して、蓬峠で沢筋へ下り、尾根を歩いたのと同じ距離だけ沢沿いに歩くという苦行山行だった。

最初の 3 時間は日ごろの出来事が頭の中に去来して、こんないい景色の中、気持ちの切替えができていない自分にイライラする。5 時間もすれば山の景色に魅入られて、写真を夢中で撮り、ずっとここに居たいように思えてくる。8 時間。いい加減、足も痛くなってくる。飽きてくる。帰ってビールが飲みたい。10 時間。何も考えられない。足を前に出せば進める。それはわかる。あと何分で着くはずだとかそんなことももうどうでもいい。この一歩がお家への一歩なのだ。

そうして 12 時間も歩くと、最初の 3 時間でくさくさしていたのがウソのようだ。しかし、まだ 3 時間運転しなければならない。

このようにして、ストレスは解消される。登山とは修行のことだ。

⑤ コゲラ (2016年6月18日 谷川岳 旧国道)



下山して～あともう少しでスタート地点に着く、というあたりでコゲラを発見した。石垣の壁面をせせこましく飛び回る。なんとか背中模様が見える程度に撮影できた。

コゲラは割と身近な鳥らしい。森の中でスコココココというドラミングを聞いたら、彼らかもしれない。都市部での公園でも彼らは姿を見せることもあるそうだ。

彼らに限らず、「あ…」とカメラを構えたら姿が消えている、という野生生物は多い。人間は嫌われ者かもしれない。カメラを構えれば逃げていく。どうすれば彼らと共生していけるのだろう。

私の他生物に対する姿勢は常に共に生きようというものだ。家畜、愛玩動物を除き、特定の生物をことさらに愛護、保護しようということはないし、駆除、敵視しようということもない。彼らの性質をよくよく知り、そのうえで距離感や付き合い方を考えたい。

家族や同僚とうまくやっっていこうとするのとまったく同じだ。距離を置かなければいけないこともある、抱きしめることもある。ヒトはそのようなコミュニケーションを発達させてきたヒトという生物だ。きつとうまくいくと信じている。